

---

# 学園の黒幕

シラバス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学園の黒幕

### 【Zコード】

Z3389Z

### 【作者名】

シラバス

### 【あらすじ】

誰が言い出したか知らない、誰なのかもわからない。しかし存在だけは知られている“黒幕”。支持派と反対派に分かれる学園で唯一両方に所属する仁神 朔は一派のバランスをとるために参謀として奮闘するが、それぞれの陣営の仲間を裏切っている事に心を痛め次第にこの状況を作り出した“黒幕”を表舞台へ引きずり下ろす事を誓う。

その展開の主人公の立ち位置によつて敵と味方が百八十度変わる策略ストーリーここに開演。

## プロローグ

僕の通う学園には“黒幕”という一風変わった存在がいる。

一般的に黒幕とは「背後で影響力を行使する強力な人物」、「表の最高権力者を裏で操る人物」と言われている。僕の言う“黒幕”も意味合いとしてはそれと近い人物だ。

誰が言い出したのかは分からぬし、誰が“黒幕”なのかも分からぬ。しかしその存在は全校生徒に認知されている。何故なら、“黒幕”が起こす騒動の影響は良くも悪くも全校規模だからだ。

時に全校清掃、時にテスト問題の略奪、時に全校の椅子を全部教室に出すなど、行動に一貫性が無く意図が全く不明な物も多い。一見善行を行っているかと思えば問題行動を起こすのだ。

増加する全校規模の行動に一時期は別人物や別グループの犯行と見られていたが、全ての現場に迷路の様な線がビッシリ書き込まれている紙が置かれているのが分かり、全ての出来事が同一犯によるものだとされている。

手掛かりはそのマークだけなので“黒幕”が男なのか女なのか、単独犯なのか複数犯なのか、学年は何年なのか、全てに置いて不明である。

“黒幕”的真意は不明だが、その行動で二つの派閥が出来た。

一つ目は“黒幕”を最上級問題児として処分をしたがる生徒会派。これにはその名通り生徒会や風紀委員、一部の教職員など“黒幕”が起こす騒動を敵視している人物が多い。規律を重んじる立場なので当然と言えば当然とも言える。

一つ目は“黒幕”の行動を支持する番長派。暫定的に番長が纏めているからそう呼ばれているだけで、この派閥には不良だけではなく一般生徒も多く所属している。しかし表立つて番長派と主張をする者はいない為、派閥内の正式な人数は分からず連携も取れていない。だから現状は一部のみが行動を起こしている。

何故“黒幕”を支持するのか、理由は其々違う様だが表立つて支持する人達は例外なく“黒幕”を信奉している。

そんな中、僕こと仁神<sup>ニガミ</sup>朔<sup>サク</sup>は不思議な事に両方の派閥に入っている。

どうしてこんな事になったのか、その答えは実に明確だ。生徒会派のトップである生徒会長と番長派のトップである番長の一人とは幼馴染で親友なのである。頼まれたら断れない性格の僕はちょくちょく呼ばれて協力することになった。

無論両方の派閥に入っている事を悟られない様に参謀として知恵を貸すだけで派閥の活動自体には参加しない。

このポジション、実はかなり大変である。両方の派閥に所属している為にどちらの派閥も潰す事が出来ない。生徒会派が勝てば学園のモラルと秩序は守られるかもしねりないが、妨害を続けた番長派は重い軽いの差はあっても全員処罰される。その対象総数は計りしれない。逆に番長派が勝てば沈黙していた番長派を主張する人達も増え“黒幕”も活動し易くなるだろう。しかし学園のモラルと秩序はズタボロになってしまつ。

と、色々語つてみたが一番困るのは片方の派閥を潰した時に僕がその派閥に所属しているという事が露見してしまう事だ。特に番長派が潰れて処分されるなんて真つ平御免だ。かと言つて番長派が勝つてモラルと秩序の崩壊した学園なんて通いたくも無い。

だからこそバランスである。

僕は生徒会派に勝利をもたらした後、間髪入れずに番長派に勝利をもたらす。逆も然り。

片方が力を付けてきたら片方で潰す。活動が不穏な方向に進んでいたらもう片方で事前に潰す。唯一、二つの派閥両方に入っている僕だからこそ出来ることである。

生徒会長と番長も気付いていない僕の秘密。

各派閥のトップと知り合いなら策略も掛けやすいだろうに、こうころ変わる戦況の中、二人は僕の事を疑う事もしない。

良心が痛まないと言われば嘘になる。

「おい、朔！仲間が生徒会室に連れてかれつちました！！ どうにかならないか！？」

「まだ連れてかれてからそんなに経つて無いんでしょう？ なら何とかなるよ」

「流石参謀！！ 頼りになるぜーー！」

だからこそ、僕は僕にこんな事をさせる原因となつた“黒幕”を許せない。

だけど別に僕は生徒会派というわけではない、番長派に所属している関係上で聞こえてくる“黒幕”的学園と生徒個人への影響は僕も認めるところだが、それはそれこれはこれ。僕をこんな気持ちにさせた“黒幕”とやらの正体を必ず明かし、その長つ鼻をへし折つてやる。

派閥も学園も関係ない、これは僕が“黒幕”に個人的に売るケン力だ。

さあ、“黒幕”を引きずり下ろす為の陰謀と策略の開演だ。

## 第一話：“黒幕”の正義

得体の知れない存在である“黒幕”だが、支持されているのにもそれなりに理由がある。

奴は札付きの不良、不登校者、いじめられっ子といった所謂学園に馴染めない生徒の味方なのだ。“黒幕”が起こす事件は何らかでその生徒が関わっている事が分かつている。

何故分かるのかと云うと、事件後に必ず一人、学園に馴染めなかつた生徒が登校する様になつていてるのだ。一度や二度ならまだしも、今年に入つて既に八件“黒幕”が関与している事件の後、その八人は学園に登校する様になつていてる。

この件に関しては生徒会派も頭が痛いだろう。

学園に馴染めなかつた生徒を登校する様に出来るなんて、ベテランの先生でも難しいのだ。だからと云つて“黒幕”的騒動を容認する事も出来ない。騒動を起こす度に全国一コースにならない様に奔走する先生を見るとそれは同情出来ると言つものだ。

いつそ学園に馴染めないで学園に登校していない生徒が全員登校すれば“黒幕”的事件が無くなるのではないかと言われているが、とある事情からそれは無い事が分かっている。

「皆聞いて！ 今年に入つて既に八件の“黒幕”に関する事件が起つてゐるわ！」

「八件かあ……」

「グラウンドを石灰で真っ白、全教室の鍵破壊、不良グループの解散事件、福田先生のカツラ盗難に」

「やめろよ……、頭いてえ」

「全く遺憾ですわ！」

「……」

僕は今、生徒会派の本部でもある生徒会室で会議に参加している。参加しているのは僕含め六人。つまり僕以外の五人が純粹な生徒会派と言う事になる。ちなみに黙つて発言しないのが僕ね。

つて黙つていたら会長の鋭い目が僕を捉えた。

「ちょっと仁神君聞いているの！？ 貴方が渋るから主要メンバーの少数会議にしていると言つのに！！」

「ちゃんと聞いていますよ犬養会長。因みに僕が会議に参加する場合は少人数で固定メンバー。ついでに僕が関わっている事を他言しないという“契約”ですよ？」

「分かっているわよ。“契約”……、ね。いつからそんな他人行儀になつたのかしら……」

彼女が生徒会派トップで生徒会長の犬養 イヌカイ 真希。

僕の一人いる幼馴染の内の一人だ。

肩に届くかくらいの軽いウェーブの掛かったセミロングが特徴で、勝気な性格だが友達思いで同じ生徒会メンバーや一般生、教職員達の信頼も厚い。

そして他言しないという件については、番長派にも関わる僕の事を大勢の人々に知られたくないからだ。大勢の人々に見られればそれだけリスクは上がる。

過去に両派閥に入つていた人はいないので、両派閥に入つていて事がばれたら真希と知り合いでもどうなるか分からぬ。

“黒幕”的事件が八件とか、今確認したって減るわけじゃないで  
しょ？

「うぬさいわね。それより今日も番長派を減らすわよ

「はいはー」

生徒会派と番長派のやっている事はゲームに近い。

生徒会派の目的は番長派を検挙して反省文を書かせ、一度と番長派の活動に参加させない事だ。

支持派と反対派の抗争と言つても別に室内で殴る蹴るの集団で暴行をするわけではないのだ。もちろん生徒たちの代表である彼女たちがそんな事をする筈も無いし、番長派もそんなことはしない。

単純に捕まえられるか、イタズラ行為で逃げられるかで争う極めて平和的な抗争と言える。参加しているメンバーはそうは思っていない様だが。

番長派が減れば妨害が減り“黒幕”行動を察知し易くなる。ぶつちやければ“黒幕”行動もイタズラと変わりがない。そこへ番長派がいろんな所で妨害行動を起こせば唯でさえ分からぬ“黒幕”的行動が更に特定し難くなる。

だからこうして番長派を捕まえて数を減らす。どうこう訳か真希に反省部屋に連れてかれた生徒は再犯率ゼロなのだ。

「で、参謀仁神よ、今田はどうこう作戦で行く?」

「うん、番長派は人数が多くすぎて中の連携が取れていなからね。其処を突こう!」

「どうこうとですの?」

「まあ見ててよ。正志、手筈通り宜しく」

「おつかれ。」

普段は一般生徒からの通報で現地に向かい捕まえるという方法もある。しかしその方法では効率が悪い。だから以下に効率よく捕まえられるかを考えないといけない。

\*\*\*\*\*

「いやあ、犬養会長は生徒会長だから、生徒会に敵意行動つて分か

「……ちょっと待って！！ 何で私のポスターを画鋲で刺し始めるのよー？」「

周りの生徒も見ていて。ボカンと いや、何人かは下駄箱とは別方向に動き始めた。

その瞬間に僕が指示した正志は掲示板に向かい生徒会のポスターを画鋲で埋め沢山していく。

一瞬キヨトンとする帰宅生徒たちだがその声で一瞬止まり声のした方に注目が向く。

「よっしゃー！ 同じよ、俺に続けえーー！」

其処に一つの大聲が響く。

帰宅する生徒で賑わう下校時間。

「やすいし？」

「これにどんな意味があるんだ？」

「うん、大体分かつて来たと思つけど、これは餌だよ。正志にあやつて貰つてあの場にいた番長派に同じ行動を呼びかける。現に一般生徒は何のことか分からずポカンとしていたけど番長派は意図を理解して行動に移つている」

「つー？　じゃあ生徒会のポスターの前を隠れて見張つていれば……」

「あっちから勝手にホイホイ来てくれるね」

実際番長派を捕まえるので一番困るのは誰が番長派か分からない事と現行犯でしか捕まえられない事だろう。証拠がないと捕まえられないのはどこのも同じだが、それなら現行犯で捕まえてやれば良い。

「今すぐ全校舎のポスター前に！」

「もう風紀委員を配置してくるよ。今頃大量だらうね」

「でも別に下校時間じゃなくとも良かつたんじゃありませんの？」

「一番沢山の生徒に見て貰えるつてこののもあるけど、一番は

「一番は？」

「下校時間つてことは皆カバンとか荷物を持っているだろ？　逃げ足が落ちて更に検挙率アップ！！」

僕は笑顔で皆の前に向いた。何故か顔を逸らされたけど。

「……エグイ」

「同情しますわ」

「あれ、正志が戻つてこないんだけど」

「ちょっと!?　何でアイツまだ私のポスターに画鋲指しているのよ！　いい加減にやめなさい！！　ていうか仁神君、私のポスターじゃなくても良いじゃない！？」

皆失礼なことを……。つて会長の怒りの矛先が僕に来た。ここは誤魔化すしかないでしょ。

「うーん、そう言われればそいつとしか言えないけど、僕は常々思つていたんだよ

「な、何を？」

「生徒会のポスターとか金の無駄だと  
グボア…」

「正志…！　いい加減にしなさい…！」

「え？　う、わああああああああ…？」

お茶を濁す事に失敗した僕と悪ノリした正志は真希に殴られた。

かなり痛い。廊下に沈んでいた僕は問題の画鋲の被害に遭つていな  
いポスターを改めて覗いてみる。

「うーん犬養会長って[写真]『写り悪いよね、本物の方が可愛いの』。  
ねえ真也?」

「俺に振るなよ、頭いてえ。てか仁神、会長後ろにいるや

「……」

僕はギギギと音が聞こえそうなほどゆっくり後ろを向いた。

そこには表情を消した真希がいた。

「お、お早いお帰りで」

「遊んでいないでさつさと生徒会室に帰るわよ。続々と反省室に運  
びまれて入りきらないうらじいから

「いえっさーー！」

「わかりましたわーー！」

「おつーー！」

「……頭いてえ」

結局風紀委員達の頑張りもあつて合計三十四人の番長派を捕まえ  
ることが出来た。

しかし僕と生徒会四人は生徒会室に戻る間、妙に真希が機嫌良かつた事に恐怖した。

...何でだろ？

\* \* \* \* \*

反省室前

薄い扉の向こうから凄い悲鳴が聞こえる。

「反省室で何やっているのか凄い気になるんだけど……」「

「あ、仁神君も入る?」

「遠慮しどきませ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3389n/>

---

学園の黒幕

2010年10月9日13時19分発行